[13: 拝島]

　うちのオフィスの朝は、比較的遅い。
　始業時間が明確に決められていないのもあるが、朝が弱い人も多く、全員が揃うのはだいたい１０時頃だろうか。
　今日は週明けということもあって、それを過ぎてしまうかもしれない。

　最近念願の引越しを決めて会社の近くに越してきた俺は、早く目が覚めたときは近くの喫茶店で珈琲を仕入れて、そのまま出社し、人が少ないオフィスでなんとなく資料を眺めている、ということも珍しくない。いわゆる意識高い系というやつに見えなくもないが、残念ながら当の本人はこんなである。
　今日も大部分がまだ出勤中であろう時間に到着した俺だったが、執務室の電気が既についていることに気がついた。誰だろう、そう思ってドアを開けると、早朝組の常連である嵯峨山先輩の姿が見えた。
　その小さな開閉音に気づいたのか、顔を上げた先輩と目が合った。

「おはようございまーす」

「おはよう。拝島、早いな」

「嵯峨山先輩こそ、早起きですね」

「天気が良かったからな」

　そう真面目な顔で言うものだから、悪かったら遅いんですか、そうからかうように返すと、少し悩んだあと、気圧の問題かな……と、また真面目な顔をして言う先輩。
　それがおかしくて、思わず笑ってしまった。笑っている俺の様子を、不思議そうに眺める先輩。

「なんだ、何か変なこと言ったか？」

「いえ、先輩らしいなあと」

「あんまり先輩をからかうんもんじゃないぞ」

「いいえいいえ、そんなつもりはなかったんです」

　自席に荷物を置いて、パーティションを跨いだところにある先輩の席を目指す。まだ仕事の気分ではないし、世間話に付き合ってもらおう。
　嵯峨山先輩……は、椅子に座って本を読んでいるところだったらしい。

「何読んでるんですか？」

「推理小説。あともうちょっとで読み終わるところなんだ」

「へー、うわ、英語ですか……」

「慣れればどうってことはないぞ」

「う……、英語は仕事だけでいいかも……」

　なんだ、情けないな。そう言って微笑む嵯峨山先輩は、いつものように男前だ。
　机の上のシックなモノトーンのマグカップといい、こげ茶色の洒落たブックカバーといい、英語の推理小説といい、どこを取っても抜け目がない。いいなあ、この男らしさを少しでも分けてもらえたらなあ。
　そんなことを考えながら先輩を眺めていると、ちょっとした違和感に気がついた。

「そういえば先輩、ネクタイ変えました？」

　我ながら目ざといな、と思った。
　控えめではあるが、快活な印象を受ける淡い赤色のネクタイだ。いつもは、スーツに溶け込むような地味めの色をチョイスしていたはずなので、余計に際立っている。しかし、よく似合っているなあ、と思う。先輩が選んだんだろうか。
　その俺の問いかけに、先輩は特段驚くこともなく、こくっと頷いた。

「よく気づいたな。これはな、貰い物なんだ」

「なるほど。……もしかして、例の藤本さん？」

「……」

　そこで口を閉ざしてしまった先輩。あ、これはそういうやつか。しまったな……。
　これはどうしようか、と繕うための言葉を考えていると、先輩が口を開く。

「そうだ。が、変じゃないだろうか。いつもつけない色だから」

　……と思いきや、心配していたのはその点ではなかったらしい。

　俺は、また勘違いしてたようだった。先輩はこの程度のことで動揺するような人ではないのだった。熱心に鏡を見るような人種ではないだろうから、純粋に似合っているかを気にされているだけだろう。
　思ったより本格的に不安そうな表情を浮かべているものだから、俺はなんだか申し訳なくなってしまった。

「いやあ、めっちゃ似合ってますよ。俺も欲しいくらいです」

「ほんとか？」

「ここでお世辞いってどうするんですか。いい色合いですね」

「……ちょっと心配してたんだが、よかった。拝島のセンスなら信用できる」

　文字通りほっと胸をなでおろした先輩は、そのネクタイを大事そうになでた。その仕草と表情がなんとも嬉しそうで、それは日頃あまり見られない先輩の姿でもあった。思わず言葉を失ってしまう俺。

「どうした、拝島、ぼーっと突っ立って」

「あ、すみません、なんでもないんです」

「そうか？」

　ならいいんだが、そう微笑んで、近くの椅子を勧めてくれる先輩。
　うーん、すごい気になるけど、これ以上突っ込むのは申し訳ないな。ここは、ぐっと我慢しておこう。

　失礼します、と腰を下ろして、最近の洋画についての話題を引っ張り出すと、そのまま始業時間になるまで、あの展開は強引すぎるやら、あの俳優の演技がたまらないに始まり、近年のあの監督のシナリオはイケてないなど、ややディープな話題が繰り広げられることになった。

　嵯峨山先輩はこの見てくれで、というのも失礼だが、アクションものよりも人情物語が好きなようで、オススメモノのチョイスはハンカチ片手でないと見られないものばかりだ。
　俺はつまみ食いしている方だが、先輩の影響もあり、最近はおとなしめの映画を見ることが多い。
　もともとは英語の勉強にもなるぞ、と勧められたのが始まりだが、今では字幕が無くても概ね意味は理解できるくらいにはなった。こうなると、邦訳されていない無名どころまで手を出せるようになるから、選択肢が広がるわけだ。

　今月の先輩イチオシの映画をスマートフォンにメモっていると、頭上から快活な声がかけられた。俺のもう一人の先輩だ。

「おはよ、相変わらず早えなお前ら」

「カジがギリギリなだけだろ」

「遠いから仕方ないだろー」

　梶田先輩が定位置――嵯峨山先輩の席のパーテーション――に肘を置いて、呆れたように声を掛けてくるのが始業の合図だ。
　お子さんが生まれるまでは早く来ていたことが多いらしいが、俺が知っている梶田さんは、内野安打メインの野球選手のように始業ギリギリを攻めてくる印象が強い。
　そのかわり、打率はほぼ100%ということなので侮れない。引越し初日に寝坊を決めた俺とは格が違うわけだ。

「サトシ、珈琲買いに行こうぜ」

「おう、ちょっと待って。拝島、ありがとな」

「こちらこそ。お陰様で次の映画決まりましたし」

　持っていたスマートフォンをひらひらさせると、嵯峨山先輩も手元のこげ茶色をぽんぽん、と叩いて。
　こちらこそ、お前のおかげで推理小説のラストが温存できたよ、と微笑んでくれる。そんな洒落た返しができる先輩との朝の時間は、やっぱり素晴らしいものだった。

　財布を片手に席を立つ先輩を見送って、俺も自分の席へ戻ることにしたのだった。

　――さて、今日も一日の始まりだ。

[14: 梶田]

「カジ」

　サトシと珈琲を買いに出た俺は、せっかくだからとオフィスビルの付近の喫茶店ではなく、少し離れたところまで来ていた。

　こないだ外回りをしていた際に偶然見つけたお店で、立地の割には空いていて、それでいて雰囲気もいいと来ているから、居つくなら今のうちなのだ。
　すぐに混むだろうなあ、と思いつつ、前回の収穫であったお店のネームカードの地図を頼りに、現地にたどり着いた。テラス席といい、控えめな看板といい、手書きのウェルカムボード、ログハウス風の扉といい、言うことはない。
　これで珈琲がうまいのだから、人気が出ないほうがおかしいだろう。

　先客はまばらで、俺たちを除くと二組ほどだった。テラスが近く日当たりのイイ席を確保して、二人揃ってブレンドを注文する。
　窓からのぞく、週明けにふさわしい快晴模様の空は、今週も頑張ろうと思わせてくれるような清々しさがあった。

　そんな時、いつもは聞き役に徹してくれる彼から、珍しく話が振られたのだった。

「どした？」

　珍しいな、そう思って彼の方を見る。
　そういえば、いつもと違うネクタイをつけていたり、なんとなくそわそわしていたりと、なにかあったんかな、と思わせる雰囲気は存分に出ていた。
　そのネクタイよく似合ってんな、そう言うと、目を丸くしてこちらを見る彼。気づいていないとでも思ったんだろうか。口を開きかけてまた噤んでしまう様子を見ながら、そんなに焦らなくてもいいのに、と思う。

　そんなこんなでコーヒーが到着し、あたりは良い香りに包まれる。砂糖を控えめに小さじ半杯くらい入れて、そのカップの中身をゆっくりとかき回しながら、少し長めの沈黙が破られるのを俺は待つことにしたのだった。そして、その沈黙はそう長く待たずに破られる。

「……こないだ、高校時代の友人と会ってな」

　その言葉を聞いて咄嗟に記憶を辿る俺。日付を確認すれば、拝島と昼飯を食った日のようだった。約束通り俺の代役を務めてくれた ”ヤツ”には、ちゃんと礼をしておかないといけないな。

「俺が早引けした日か」

「そうそう、あの後。それで、さ」

「おう」

「俺、……よくわかんなくなった」

「……へ？」

　変な声が出てしまった。

突拍子もないな、と思ったけど、こんなシーンで彼は人をからかうようなタイプではない。今までの付き合いでよくわかっている。

――よくわかんなくなった。

抽象的なその単語から、俺は一つの仮説を導き出す。そして、今のこの状況と合わせると、ひどく腑に落ちる内容であった。
だから俺は、これは本当に真面目な相談なのだと察することができた。
わざとらしく小さく咳払いをして、先程よりも少しだけ声のトーンを落として、改めて聞くことにする。

「なんか、あったんだな」

「……」

しばらくの沈黙の後、その言葉には答えず、一回こくりと頷く彼。ここに来てもなお、話すか話すまいかを考えているのかもしれない。

もちろん、こんな時に助け舟を出すのは俺の役割だ。
今までもそうだったし、今後も変わらないし、代わるつもりもない。だから、おもむろにスマホを開いて、予定表を確認するふりをする。

「午前中の会議はないんだったよな、確か」

「……ん、そうだな」

「んじゃ、チョコレートケーキにしよっかな」

すみませーん、と先ほど珈琲を持ってきてくれたウェイターさんを呼び止める。
テーブルの端に置かれていた小さいメニューに目を通して、ケーキのラインナップを確認しておく。この店のオススメだというガトーショコラを二つ追加注文して、彼の方へと向き直った。いつもと逆だよな、そう思いつつも、話の内容はとても気になっていた。そして、それ以上に、彼の役に立ちたいという気持ちも。
だから、自分らしくはないと思いつつも、また、わざとらしく咳払いをしてしまうのだった。

「……じゃあ、聞いてもいいか？」

「……」

二人して頷きあったのを皮切りに、彼は先週あった出来事を、思い出すように話し始めたのだったのだが、その後すぐにガトーショコラが運ばれてきて、不意をつかれた彼の表情がなんとも面白かったことだけ付け加えておく。

[15: 嵯峨山]

「混んでるなあ」

「終電だしな。もう一本早ければもう少し空いてたかも」

「結構違うもんなの？」

「うーん、快速だからそうでもないかも。十分くらい変わるんだよね、到着時間」

「ほえー、そりゃみんな強引にでも乗りたがるわけだね」

うちは各停しか止まらないから気にしたことなかったなあ、そう言ってニコニコしながら吊革を掴み直す藤本。結局これで全員が帰るの遅くなっちゃうんだよね、と、聞いた人によってはリアルファイトに発展しそうな発言をその笑顔のままでするもんだから、思わず辺りを見回してしまった。
誰も聞いてないよ、そうこぼす藤本に、酔っぱらいは怖いんだぞ、というのだが、楽しそうに笑うだけで効果はなさそうだった。まあ、いくら酔っ払いでもこの巨漢に絡もうとはしないだろうが。
乗り換えの待ち合わせの影響か、到着時刻を過ぎてもドアは開いたままだ。風が涼しいね、そう言ってスーツの首元をパタパタさせる藤本は、だいぶ暑そうだ。
駅構内にアナウンスが流れ、間もなく発車するという旨が告げられる。
ちょうどその時、扉が閉じようとして、慌てて数人が追加で駆け込んで来て、また扉が開く。あまりにタイムリーな出来事に、二人で顔を見合わせて笑ってしまったのだった。

時折停車しながらも、なんとか電車は進んでゆく。自由に動けないほどには混雑しているが、隣に藤本が居るというだけで、それは些細な問題となるのだった。
車両が揺れるたびに肘が触れあったり、荷物が当たったり、それをいちいち小声で言うものだから、退屈している時間なんてなかった。また、揺れるたびに漂ってくる昔から変わらない藤本の懐かしいにおいが、自分を若返らせてくれるようでもあった。俺は、たとえ不快指数の高いはずの満員電車の中であろうとも、それを有意義な時間として過ごすこともできるのだなあと、しみじみ感じていた。そして、こんな各駅停車なら悪くないな、そう思うのだった。

楽しい時間はあっという間に過ぎるものだ。

　今回も例に漏れず、会社の自販機のラインナップの話題になったところで最寄り駅にたどり着いた俺たちは、人の流れに逆らわないように扉を目指す。多少強引にでも進まないと、このまま終点まで向かってしまうからだ。

「なんだー、結構近いんじゃん？」

「お前のおかげでな」

「んー、……それほどでも」

　少しテンションの下がった、というよりは、眠そうな声。もう結構な時間だ、酔いが冷めて少しだけ頭が回ってきた俺とは対照的に、藤本は眠そうにしている。
　改札機にICカードを押し付けて、藤本も――特に残高不足と言われることもなく、ふたりとも、無事駅構内からの脱出に成功した。電車内、もとより駅構内より数度程低い空気に、なんだか生き返ったように感じる。
　そんな、いつもとあまり違わないはずの風景も今日は新鮮なもののように思える。家まではそう遠くないし、あともう少しだ、そう気合を入れ直して歩きはじめようとしたところで、後ろから少しトーンの下がった声がかかる。

「ねえ、サガちゃん」

「どした」

「トイレ……」

　そのままふらっと前に倒れ込みそうに見えて、俺は慌てて彼の肩を抑える。実際は倒れ込んだりはしないだろうけど、ふらついたのは確かだったらしい。ありがと、そう言って足元を整える藤本。これは、なんだか申し訳ないことをしてしまったな。

「ごめん、気づかなかった」

「だいじょうぶ、うーん、駅ん中あるかな」

「改札の外にあるから、行こう」

「ごめんね、ありがとー」

　急がなきゃ、と言って歩き始めた彼の肩を支えながら、決して速いとはいえないペースで進む。
　大丈夫だろうか、そう思って藤本の方を見るものの、そんなに急を要している風ではなく、一安心する。

　我が最寄り駅の優れている点は、アクセスはもとより、トイレが綺麗であること、それに加えて改札の内外にあること、これに尽きる。

改札外にあるお手洗いというのは、基本的に汚れがちで混んでることも多いものだが、本駅についてはお手洗いが内側にも設けられていることによって、結果的に混雑が緩和されている。それに加えて、本駅の管理者が優秀なのだろう、いつ見ても清掃が非常に行き届いているのだった。嫌な匂いを感じることも少なく、「都心まで30分」のキャッチコピーよりも、「トイレがめっちゃ綺麗」なことを推したらどうなのか、と思うほどである。

藤本を無事トイレまでエスコートした後、ついでに自分も、ということで通り慣れたお手洗いへの道を進む。そこに彼の姿がないことに一人頷きつつも、なぜだかそわそわしてしまって、辺りを見回す。たまたまなのか、人の姿はなく。個室の空き具合を見ても、おそらくこの空間には俺と藤本の二人しかいない。だから、俺はなんとなく声をかけた。

「セイちゃん、大丈夫か」

「……うんー、だいじょぶよー」

「良かった。じゃあ先、出てるな」

ありがとー、その声を聞いて、ここは大丈夫だろうと思い、後ろ髪を引かれつつもその場を後にする。洗面所のガラスに映る自分の顔は、時間相応に疲れていたけどまだまだ頑張れそうだった。
お手洗いから出て、再度駅からの脱出を試みる。そのタイミングで、入れ替わりトイレに駆け込む人が数名。ほんとに、スキマ時間だったのだろう。
辺りを見回すと、先程よりも人はまばらになっていた。改札付近の電子パネルは消灯していて、今日も長い仕事を終えたようだった。出口を再度くぐって見上げれば、月は僅かに陰っているだけで大きくこちらを照らしてくれていて、時折雲がかかるのも、また素晴らしい。
お昼はそこそこ賑わっているバスターミナル付近のベンチに腰を下ろして、藤本を待つことにする。この時間の利用は深夜バスくらいだが、到着までは後三十分ほどあり並んでいる人はまばらだ。
ベタついたワイシャツと地肌の間に隙間を作って、自分自身よりはだいぶ涼しい外気を招き入れる。途端に汗の匂いが漂ってくるが、やむを得ない。さっきから藤本との距離がかなり近くて、自分の臭いが心配になっていたから、それを少しでも緩和する意味もあった。
焼け石に水、といった類のものであることは分かっているが、少しでも自分をよく見せたいといった性質のものなのかもしれない。……これを青春と言ってしまったら、この街の若人に申し訳ないかもしれない。そんな青臭いことを考えていると、大柄な人影が手を振りながらこちらに駆け寄ってくるのが見えた。それはまさに、昔にタイムスリップしたかのようなノスタルジーだ。

「サガちゃんー、ごめん、おまたせ」

「よくここがわかったな」

「ふふ、まかしといて、サガちゃん見つけるのが特技だから」

「履歴書には書けない特技だな」

「サガちゃん、それなんかボケきれてないよ難しいよ……」

「……悪かったよ。それじゃあ行こうか」

　藤本の鋭いツッコミに少しだけ傷つきつつも、ずり落ちかけていた荷物を抱え直す藤本を横目に見ながら腰を上げる。こっちだよ、そう言って藤本の肩を軽くノックする。
　今度は自然に触れられただろうか。
　鞄の端から少しだけはみ出した緑色のキーホルダーが、それに合わせて僅かに揺れた気がした。

[16: 梶田]

「それでな、……あ、すまん、退屈だったか？」

「あ、いや、そんなことはないよ」

　俺は彼の話を聞きながら、その登場人物——藤本——という人物に対して、思いを巡らせていた。
　正直なところ、その時の俺は、なんとも言えない気持ちを抱えていた。”この”気持ちを形容するための言葉は知っているが、この場にはあまりにもふさわしくない。
　いつかこういった日が来る、それは分かっていたけど、あまりに唐突で、だから俺も心の準備ができていなかったのかもしれない。だから、俺は自然と疑問に思ったことを尋ねた。

「サトシはさ」

「うん」

「その、藤本さんが好き、なんだな」

「……そう、なのかな」

「まだ、わかんない？」

「……」

　その後、黙り込んでしまったのを見て、失敗したかな、そう思ったのだけど、彼の表情はそれほど暗くはなく、むしろ、真面目に考えてくれているんだな、と思った。手元の珈琲の表面がわずかに揺れていて、それは彼の迷いなのか、それとも、俺の震えなのか。

「……好き、なのかな。うーんでも、だけど」

「だけど？」

「まだ、よくわかんない……かな」

「……そっか」

　その答えだけで十分だった。
　初めから、俺が持っている選択肢は一つしかない。分かっていたつもりだが、そのことに目を背け続けていたことも、また事実だ。だから俺は、ここでは精一杯、役者として喜劇を演じなければならないのだろう。

「そっかー、そうだよなー」

「なんだ、嬉しそうだな」

「そりゃー、嬉しくないわけないじゃん？」

「……そう言われると何も言えないな」

「だろー。まあ、思うところがないわけではないけどさ」

　その言葉に虚を突かれたのか、きょとんとした表情を浮かべる彼。どうやらこの話はこのティータイムでは終わりが見えそうにない。それに、この喫茶店では力不足だろう。
　お酒が必要だろうか、あるいは。

「サトシ、金曜日の夜空けといて」

「……あ、そうか、もう結構良い時間なのか」

「そうそう。続き、聞きたいけどさ、そろそろ山門さんに怒られるかもなと」

「確かにそうだな、ありがとう」

　そう言って伝票を拾い上げようとしたところを、横から攫われてしまう。

　先程までとはうって変わって晴れやかな笑顔を浮かべる彼は本当に格好良くて、少しだけ自分の体温が上がるのを感じる。その顔から目を逸らしてしまったのは仕方がないだろう。
　会計を済ませて、外に出ると、もうすぐお日様が頂上まで登ろうとしている頃だった。打ち合わせ、ということで済ませば問題ない。実際、山門さんだって咎めることはないのはわかっている。この場で話を切り上げたのは、それが本当の理由ではないのだから。
　そんな俺たち二人、帰り道のステップは軽やかであった。ごちそうさま、そう言って上着を肩にかけようとしたところで、声がかかる。

「カジ」

「なあに」

「珈琲、美味かった」

「……おう」

　その彼の一言が、今はとても嬉しくて、だけど少しだけ恥ずかしい。その気持ちを隠すように行こうぜ、そう言って歩き出す彼の横について、今度は仕事の話を始める。
　少しだけ目線が低い——とは言っても、ほぼ同じ高さだが——彼と目が合う、この距離感が好きだ。無論、この場所を誰にも譲る気は、今のところはない。
　会社までの短い道中、真面目な話を切り出してみれば真摯に聞いてくれて、その中に時折冗談を混ぜると、途端に困ったように俺を見る、その表情一つ一つがたまらなく可愛いと思う。だから、からかうように彼の肩を抱いたり、腕を組んだり、時には髪を撫でてしまうその手を、許してほしいと思う。
　——今も、これからも。そして。

　（この先も、ずっと……）

　吹き寄せた優しい風を受けて空を見上げると、先程まで少しだけのぞいていた薄い雲も晴れて、澄んだ青空が一面に広がっていた。駆け出して日陰から出ると、蒸し暑ささえ感じるほどだ。その陽射しが、今はとても心地よい。
　本当に、今日もいい天気だ。

[17*]

　オフィスに戻った頃には、もう昼メシの時間だった。昨夜ほぼ完成させていた書類を仕上げて大濃さんに渡した後、長針と短針が重なるのを見届けて、俺はフリースペースへと足を伸ばしていた。
　当社のオフィスは横長の形状となっており、その両端にはフリースペースとして、喫茶店にあるようなテーブルが配置されている。この場所が素晴らしいのは、その眺めに尽きるだろう。
　執務室内は機密性を維持するためにどうしてもブラインドが必要になるが、フリースペースであるここは、それに遮られることはない。
　その中の特に眺望がいい定位置で、夏希手作りのサンドイッチをつまみながら、俺は、今はもう遠い過去の話を思い出していた。

――そうだ、あれは、いつものように彼の誕生日、二人で飲んでいた日のことだった。

*****

「サトシ、誕生日おめでとう」

「ありがとう。カジも、もうすぐおめでとうだな」

「うー、もうすぐ歳食っちゃうなー。でも、今年もいい年だったな」

「まだ終わってないぞ。とはいえ、一年、あっという間だったな」

「ほんとなー。すっかりアラサーだよ、アラサー」

　わざとらしくそう言うと、俺もだなー、と苦笑いする彼。
　こうやって二人で飲むときは、お互い帰りやすい場所を選ぶことにしている。俺とサトシは同じ沿線に住んでいるから、今日も例に漏れず、この国随一のターミナル駅が最寄りのお店を選んだ。
　ただ、今日は"特別な日"ということもあり、いつもよりも騒がしくはなく、少し値が張るところに来ている。
　乾杯はなんとなくビールだったので、次の候補を見繕おうと重厚な表紙を持つメニューのページをめくっていると、二杯目から早速ウイスキーの水割りを嗜んでいる彼が口を開いた。

「そういえば、夏希さんは大丈夫なのか？まだ新婚だろう」

「うん、今日はだいじょぶ。ちゃんと話してあるからさ」

「……それは、そうだろうけど」

「それに、ほら。特別な日だし」

　今までもそうだっただろ、と付け加える。その答えでも不安だったのだろうか、相も変わらず釈然としない表情を浮かべている彼。だから、俺はもう一押しすることにする。

「よーし、今日はお泊りOKももらってるし、サトシの家で二次会だなー」

「おいおい。まあ、いいけどさ」

「よっしゃー、飲むぞー！食べるぞー」

　あ、笑顔が戻った、良かった。こうでなくちゃ。
　今日は（奮発して）完全個室のお店を選んだので、店員さんを呼ぶにはインターホンを使う必要がある。受話器越しに注文を伝えつつ彼の表情をちらっと伺う。俺自身は彼に対して大概無遠慮であることは自覚しているが、彼はそんな俺をいつも、ふんわりと受け止めてくれる。
　もちろん、嫌なときはしっかり嫌と言える人間であることを知っているから、俺は彼の表情を、言葉を信用している。受話器を置くと、すかさずツッコミを入れてくる彼。

「今日はダイエットはなしか」

「なし！つうか、このタイミングで言うなよな」

　追加で頼んだ飲み物はシャンディーガフだし、それに合わせて焼き鳥の盛り合わせも追加したし。どう言い訳してもダイエットとは程遠いものだったのだけど、今日くらいは大目に見てほしい。彼もそれは分かっているのだろう。グラスを片手に苦笑いを浮かべるだけで、それ以上の追求はしてこなかった。

「それにしても、三十路か」

「サトシだってあと二年の猶予だからな」

「そう言われても、全然実感がわかないもんだな」

「俺だってそうだよ」

「でも、カジはその腹が、」

「それ以上は禁止！！」

　容赦ないな、そう思って次に注文する飲み物は緑茶ハイにすることを、心の中で決めたのだった。
　その後も、俺達は仕事の近況で盛り上がっていた。同じ部署に居るとはいえ、実際の仕事で一緒になることはなかなかない。それはうちの会社の業種に依るところでもあるが、拠点が大きくないために少人数で仕事をこなす必要があるのだ。そのため、横展開を行うために業務時間に限らず、ランチブレイクやアフターファイブの時間を使ってナレッジシェアを行うことは少なくない。
　時間の限られたミーティングでは、報告書の行間まで伝えきるのは難しい。俺たちのように横のつながりがある場合は、こうやって情報交換を行う方が結果的に効率もよいのだ。もちろん、純粋に仲が良いから、という要因の方が多大にあるわけだが。
　その話の中で、彼がリクルーティングに行った大学で良さげな学生を見つけたという話から、大学時代の話に遡る。
　俺は実家が裕福だったこともあり、海外への留学なども含めて好き勝手させてもらっていた。一方彼は複雑な家庭事情だったこともあり、不自由なく過ごした俺とは真逆の生活を送っていたようだった。でも、彼はそのことを妬みも、驕りも、悲観することもしない。
　だから、彼と話すときは背筋を正さなくてもよいのだ。彼からしたら当たり前のことなのかもしれないけど、そんな当たり前は俺にとってはとても心地よいのだった。

「俺らも入社して時間が経つなあ」

「だな。相変わらず後輩は入ってこないが」

「さっき言ってた子は、良さそうなのか？」

「能力についてはわからないけど、好奇心もあるし、人懐っこい雰囲気だったし、向いてそうだなと思ったよ。ただ、宇宙工学専攻希望らしくて」

「なるほど。大学とか、研究所とか、ああいったところと戦うのは少し分が悪いよな」

「そうなんだよな。でも、まだ配属前の学生さんだから、ながくコミュニケーション取っていけば……」

　俺と彼は同期入社で、それもたまたま同じ拠点に配属されたものだから、本当に運が良かった。もちろん、景気という曖昧な世風で採用される人数は変わるものだから贅沢は言えない。そういうわけで、入社して早くも五年目となる我々だが、一向に後輩社員が入ってくる気配は無かった。
　下積みの成果と景気の波が少し上向いたタイミングもあり、大学へのリクルート活動を始めることができた今回。彼は望んでいた金の卵を見つけることができたようだった。
　一方で、この後輩獲得騒動の裏では女性社員による出産、及び結婚式ブームが訪れている。福利厚生の賜物で復職前提というのもあり、幸いにも仕事への影響は軽微だ。本拠点は女性社員も多いのだが、そのほとんどがここ数年でゴールインしているということで、”そんな”話題には事欠かない。

「栄さんも結婚するんだってなー」

「トリだと思ってたんだけどな。山門さんは大トリだとしても」

「招待状見たか？海外でやるんだとよ」

「まだ見てなかった。そりゃあずいぶん羽振りがいい話だな」

「チケット取るから早めに返信してくれって書いてたぞ」

　確か来週いっぱいくらいだったかな、そう言うと、ちょっとまってな、そう言って鞄から手帳を取り出す彼。すっかり忘れていたんだろう、この話をしておいてよかった。取り出した手帳はだいぶ使い込まれていて、その上に塗装が少しだけ剥げた重厚そうなペンを走らせている。そして、手帳の中身の文字は読みやすくて綺麗なことを、俺はよく知っている。
　そんな彼の姿を見ながら、俺は本当にさりげなく聞いた。ここでしか、このタイミングでしか聞けないことを。

「サトシはさ、……結婚、しないの？」

　これは、聞くたびにはぐらかされてきた質問だった。もちろん、今日だってその答えを真面目に聞いているつもりはない。ある意味、世間話のようなものだった。彼が困るのはわかってはいたが、そこにブレーキを踏むには、酒が進みすぎていたようで。

「……」

　でも、今日の彼はただ困っている、というよりは、何かを悩んでいるようだった。むむ、もしかしてすでにその近くまで行っているというのか。もしそうだったら非常に悲しいぞ、俺の知らないところで。俺は、お前の一番の親友だと思っていたのによ。

「もしかして——」

「……いや、ないよ。カジもよく知ってるだろ」

「……」

　その言葉を遮るように、"いつもの"ように、彼が答える。
　グラスをそっとテーブルに置いた彼が、ちらりと俺の方を見る。カラン、とグラスの中の氷がわざとらしく音を立てた。
　目元が少し紅く染まっているのは、そのグラスの中身のせいだろう。ごく限られたお店しか置いていない、皇族が嗜んだと言われるウイスキーベースのお酒。ふと、細められたその瞳が俺の顔を捉える。目が合うのはいつものことなのに、その時はなぜか少しだけ、どきっとした。

「……そう、だよな、ごめん。まだ若いしな、サトシは」

「二つしか変わんないだろ」

「でも、サトシのほうが大人だなあ、って思うよ」

「何だ、藪から棒に」

「俺、わかってるとおもうけど、ガキのまま大きくなったようなもんだからさ。この先、ちゃんとやっていけるか、不安なんだ」

　それは、本心から出た言葉だった。
　夏希にプロポーズして、OKを貰って、それで一人前になったつもりでいた。結婚式はまだ先だけど、夏希はすでに招待状のデザインを考え始めていて、立ち止まって悩んでいても、時間は確実に進んでいく。
　もちろん、俺だって何もしてこなかったわけではない。今こうやって自分一人で妻子を養っていけるだけの甲斐性を手に入れることができたし、何も心配はない……と思ってはいるが、時折大きな不安に襲われることがある。
　それは多分、ここまでの人生で俺があまりにも苦労をせずに来てしまったから、というのがあるのだろう。そんな贅沢な自覚だけは常にそこにあった。
　一人で生活していくぶんには、何も問題はなかった。だけど、誰か他の人と歩んでいくとすれば、"自分だけのもの"であった人生が、そうではなくなる、ということだ。いずれ必ず訪れるであろう失敗、挫折といった類のものは、味わってこなかった分だけ増幅すると聞く。だから、いつハマるともわからないその"落とし穴"に、俺は怯えてしまっているのかもしれない。
　口を結んだまま顔をあげると、彼は神妙な面持ちで、考え込んでしまっているようだった。自分が変な話題を振ってしまったせいか、と反省して話題を変えようと口を開きかけたところで、彼の少しだけ低い、優しい声が俺の耳を捉えた。

「……カジは、カジのままでいいんじゃないかな」

　彼がつぶやいたその一言が、俺にははじめ、理解ができなかった。それが表情に出てしまったのかわからないが、手元を見つめながら、続けて彼が言葉を紡ぐ。

「カジはさ、めっちゃ努力してるし、皆のこと考えてるし、頼りがいもあるし、それに、いいやつだし。もちろん、自分じゃわからないかもしれないけど――」

　そこで言葉を区切る彼。手元のグラスを少しだけ揺らして、それがまた小さな音をたてる。あまりにも間抜けな顔をしていたのだろう、彼は少しだけバツが悪そうな表情を浮かべていた。

「みんな、カジに助けられてるよ。……少なくとも、俺は、そんなカジが大好き」

　――だから、そのまま進んでいけばいいんだと思うよ、梶田秀也は。

　何言ってんだろね、俺、そう言って彼は恥ずかしそうに、でも、その言葉にからかいは感じられなかった。俺は言葉を失ってしまって、彼の手元――グラスを眺めていることしかできなかった。その指先がわずかに動いて、俺は顔を上げる。

「……だけど、それでも、よくわかんなくなって、どうしようもなくなったら、俺に言ってくれれば、話を聞くことくらいはできるから。まあ、俺はまだ"独り身"だし、励ますことしかできないけど」

　そこではじめて、彼は俺の目を見た。
　彼がこちらを見つめる温かい表情に、少しだけ靄がかかって、その時初めて、俺は涙を流していることに気づいた。もちろん、彼はそれを茶化すつもりはないんだろう。だけど、途端に恥ずかしさが押し寄せてきて、顔に熱が集まってくるのがわかった。

「あーもう、恥ずい！……何やってんだろ、俺」

「カジらしくないな」

「うるせー。いいだろ、たまにはよ」

「すまん、生意気言った……そういえば、カジのほうが先輩だったよな」

「同期！同期だから！」

　そういえば、にずいぶん力が入っているな……。
　彼は、俺の2個下とはいえ、同時期の入社――いわゆる同期だ。でも、こうやってプライベートでも付き合いがあって、今はこうしてお互いの誕生日を祝って、一緒に盃を交わしている。
　だから、俺は本当に幸せだと思うのだ。

「おれ、サトシと同期でよかったなあ」

「今日は奢らないぞ」

「分かってるって！ちゃんと財布も持ってきてるしよ」

　一度財布を忘れて飲みに来てしまったときは、背筋が冷える思いがしたものだ。その時は夏希が迎えに来てくれて、難を逃れたのだが。

　彼は、夏希とも交流がある。
　俺がいつもいつも彼の話をするもんだから、是非会わせて欲しいと言われたのが始まりだ。それを彼に伝えると、苦笑いしながらも構わないよ、と言うものだから、最初は仕事帰りに、パスタが美味しいと評判だった喫茶店で食事をした。
　お互い緊張して全然喋らないものかと思いきや、彼がすかさず女子力を発揮して、いつの間にか料理の話題になる。間をどう取り持ったらいいんだろうかと、お互いのことをよく知る俺の心配を他所に、本当に楽しそうに話すお二方。煮物の味付けの話や、最近のスーパーの品揃えの話や、野菜の価格の話など、俺には全くついていけない話題となる中、気づけば二人は連絡先を交換していた。そして、その週末の晩飯には、何故か彼の得意料理だったはずのハンバーグが並んでいた。
　また寿英くんとご飯食べたいな、そう笑顔で言われたときは一瞬やきもきしたものの、すぐに誇らしい気持ちになった。その日以降、彼と飲みに行く日は何時に帰ってきても構わない、というルールが

できて今に至る、というわけだ。

「でも、カジもそうやって不安になるようなことがあるんだな」

「そりゃそうよ、にんげんだもの」

「……誠意が感じられない」

「えー、誠意しかないじゃん」

「……もっと飲んだほうが」

「これ以上飲んだらうちどころかサトシの家までもたどり着けないー！」

　……というのはオーバーだが、少し余力を残しておきたい、という気持ちがあった。
　その言葉に目を丸くした彼は、じゃあ水でも頼んでおくか、と言って呼び出しボタンに手を伸ばした。サトシはもういいのか、と尋ねると、もう少しカジと話したいから、俺もこのくらいにしとくよ、そう言って微笑む彼。
　やっぱりかなわないなあ、改めてそう思いつつも、彼の優しさに甘えることにしたのだった。

***

「ただいまー」

「おかえり。まあ、お前の家じゃないけどな」

　彼の家は、一人暮らしとは思えないくらいよく片付いている。自分が独身だったときは、ゴミ屋敷とは言わないが、平日に片付けをする余裕なんて無かったものだから、土曜日の半日は片付けで潰れる事が多かった。
　今でも一人暮らしをしている彼は、入籍を期に遠方へと越さざるを得なかった俺と違って、比較的アクセスが良いところに住んでいるのだ。
　独身にはやや広いと思われる三部屋の間取りも、彼なりにしっかりと使いこなせているようだった。焦げ茶色に統一されたリビングの空間に佇む紺色のソファーは、重厚そうで価値をうかがわせるものだが、その端っこのイイポジションが、俺の特等席だった。
　スーツを剥いで身軽になった俺は、ついでに、とベルトも放り出してしまう。うーん、楽になった、ま

た少し太ったかなあ。どうせ後で風呂を借りて着替えも借りるのだから、と思いを巡らせつつ、いつものポジションにスーツをかけておく。
　すべきコトを一通り終えて定位置に腰をおろした俺。家にいるときよりもだらしないな、と思いつつ、彼がそれを全く気にしないのも知っている。最初に遊びに来たとき、借りてきた猫のように床に正座していた俺を見てくすっと笑われたのを今でも覚えている。その時は、日頃感情をなかなか出さない彼が笑ってくれたということが無性におかしくて、俺も一緒になって笑ってしまったのだった。
　ソファーと同じ生地の大きなクッションを抱えこむと、彼の家の香りをより強く感じる。なぜだか落ち着くこのにおいに、忘れかけていた眠気が少しだけ忍び寄るのを感じた。

「いつものでいいか？」

「あ、うん、いつものでー」

　はいよ、そう言ってキッチンで作業を始めた彼を遠目に見つつ、否が応でも目立つ大きな本棚に目をやる。
　壁のうち一つを彩るそれはなかなかの大きさだが、寝室にもこれと同じ位の大きさのものがあるのも知っている。彼はなかなかの読書家なのだが、電子書籍には一切手を出さないために、どんどん本が溜まっていくのだ。

　俺が初めてこの家に来たときは、まだリビングの本棚は半分くらい余裕があったはずだが、それも間もなく埋まろうとしている。ここが埋まったらどうするの、と聞いたときの答えは、その時に考える、という能天気なものだった。
　彼の紙の城――とも呼べるこの本棚のラインナップは文庫本が中心だが、中には技術書が混じっていたり、新書があったり、雑誌があったり、四六版サイズの本が綺麗に並んでいたりと、眺めているだけで好奇心が満たされるものだ。
　来るたびに新しい本が増えているものだから、それらを一つ一つ確認するのが最近の楽しみとなっていた。

「サトシー、本見てるわ」

「……おう」

　台所から聞こえてくる食器が触れ合う音だけが辺りを包んでいる。テレビがない部屋というのもいいものだ。家にいて、なんとなく手持ち無沙汰なときはつい電源を入れてしまいがちだが、それがない分、会話が捗るというものだ。
　ソファーのぬくもりに負けそうになっていた体を持ち上げて、今日の獲物を探しに本棚へ足を伸ばす。
　本の並べ方にはあまりこだわりがないようで、全体的に無秩序だ。雑誌のように綺麗に並んでいるものもあり、文庫本のように一見意味がありそうな並び方をしているものがある一方、新書は背表紙の色からしてバラバラだ。
　その背表紙たちが彩る不規則なアートを眺めていると、キッチンの方から小さなサックスの調べが聞こえてくる。
　うーむ、深夜のジャズはまことに素晴らしい。ひと時代前の――親父さんの形見らしい――オー

ディオ機器が、それはそれは味のある音を奏で始めたのだった。

　それにしても贅沢な時間だ。
　時間はもうすぐ午前二時、といったところだが、キッチンからは仄かに甘い匂いが漂ってきている。明日は休みときているし、気を遣う必要もない。そんな俺の誕生日は、今年もいい日となるんだろうな、という予感がした。

　さて。"新刊"がどこに置かれているかは何となく把握しているから、俺は真っ先にそのエリアに狙いをつけた。背表紙を流し見したところ、最近の彼のトレンドはエッセイのようだった。
　その中で一番最近買ったのだと思われる位置にある本――新書だろうか、は、ほかのものと違ってブックカバーがつけられていて、もしかしたら最近彼が読んだ本なのかもしれない。
　何となく気になって、俺はその本を手に取っていた。そのタイミングで、後ろのほうから声がかかる。

「今日は結構寒かったな」

「ほんとだなー。ここ一週間であっという間に冷え込んできたよな」

「このくらい寒いと、より美味しくいただけるな」

「おー、待ってました、これこれー」

「後は、ホールだと多いと思ったからハーフサイズだけど」

「おおおお！これ、食べてみたかったやつー！」

　マグカップの次に運ばれてきたのは、まさにこの日にピッタリなものだった。お盆に載せられているそれに、思わず目を奪われてしまう。その様子に満足げな笑みを浮かべる彼。
　そのケーキは、世界的に著名な洋菓子屋で一番人気と謳われていたチョコレートケーキだった。ずっと気になっていたものの、営業時間が不規則なのと、数量限定なこともあり、これまでありつけないでいたものだ。
　ホールの上に散りばめられた金箔が高級感を演出しており、手を付けてしまうのが勿体無いなと感じてしまうほどだ。

「さすがサトシやー！」

「俺も食いたかったからな。カジ、改めてだけど、誕生日おめでとう」

「もう0時過ぎちゃったか。ありがとー。サトシもおめでとうな」

「ありがと、俺のほうはさっき終わっちゃったけどな」

「海外ならまだ昨日かもしれないぞ」

「……その発想はなかったな」

　チョコレートケーキのお供は、彼特製のレモネードだ。こだわってる訳ではないよ、と言うのだが、これがなかなかイケるわけで。少しだけお酒が入っているのがミソで、温まりつつもほろ酔い気分になれる、というスグレモノなのだ。

　真っ黒なマグカップには、白い動物のシルエットが描かれていて、並べてみると動物園のようでもある。カップを合わせて乾杯、というのも乙なものだ。そのタイミングで、机の端に置いておいた小箱を彼に手渡す。

「忘れないうちに渡しとく。海外ではきっとまだ昨日だからセーフだよな、決して忘れてたわけじゃないぞ」

「ありがとう。別に、そんな気を遣わなくても……」

「俺が買いたかっただけだからいいの！ 気に入ってもらえるといいんだけど」

「大丈夫だろ、カジが選んでくれたものだし」

　今開けてもいいのか、と聞かれたので、小さく頷いて肯定の意を伝える。嬉しそうに、でも丁寧に包装を解いていく様子を見て、俺はそれだけでひどく満たされていた。

　小箱の中身は、歴史のある文具店で一時間くらい悩んで決めた万年筆だ。彼がずっと同じペンを使い続けているのは知っていたが、はたから見てもそれがくたびれてきていて、使ってもらえたら、と思って選んだものだ。
　俺は字を書いたりはしないから何が良いのかさっぱりわからなかったが、その様子を見た店員さんがそれはもう丁寧に色々と教えてくれた。同僚へのプレゼント用なんです、と伝えると幾つか見繕ってくれたので、その中で彼の体躯に似合う重厚そうなものを選んだ。
　女性にはちょっと重いかもしれないですけど、と心配そうな表情を浮かべた店員さんに、男性だから大丈夫です、と答えると、それなら大丈夫ですね、本当に良いものですから喜んでいただけると思います、そう嬉しそうに言われたのが印象に残っている。

　小箱を開けて中身を見た彼は目を見開いて、俺の方を見る。もう一度小さく頷いてやると、彼は、壊れ物を触るようにそっと万年筆を持ち上げて、ペン先を、持ち手を、ただじっくりを眺めているようだった。
　その様子を見ているのがなんだか恥ずかしくなって目を背けてしまったのだが、その彼の手先が、少しだけ震えているのがわかった。

「カジ」

「ん」

「ありがとう、大事、にするよ」

「……おう」

　そのことに突っ込むなんて無粋なことはしない。幸せだな、と思った。
　この時間がまだ続くなんて、夢のようだ。

――こうして、俺"たち"の誕生日会が、始まったのだった。

***

「ごめん、お手洗い」

「おーう、いってら」

　レモネードをちびちびやりながら、最近夏希と喧嘩したことについて子供っぽい愚痴を垂れ流していた。
　洗濯物のたたみ方が雑だとか、食器の洗い方が中途半端だとか、そういった些細なことで言い合いになることが多い。
　我ながら子供っぽいなとは思うのだが、こういったことは理屈で語れるようなものでもないこともわかる。ただ、そのときの出来事をこうやってうん、うんと聞いてもらっていると、自分でも気づいていなかったことが自ずと口から出てくる。こうして、自分も悪かったんだなあという事に気づいて、次会ったときにはちゃんと謝ろう、と思うのだった
　彼が退席して手持ち無沙汰になった俺は、先程本棚から拝借した本をおもむろに取り出した。話の種にでもしよう、という事を考えていたのだと思う。
　表紙はブックカバーで隠れていたから、自然と栞が挟まれているページを開いた。

　字面を見ると、経済や経営、という種類の本ではなかった。目に入ってきた単語は、デート、気持ち、告白……と、もっと身近な――俗世的な文章だった。
　その時、俺は彼でもこんな本を読むのか、という不思議な違和感と、強い好奇心を覚えた。これはただの恋愛本というわけではないだろう。
　彼は独り身であって、それを善しとしているという風格があった。だからこそ、特定の相手がいる、ということはおそらくないし、それに対して強く興味を示している、ということも全く感じてこなかったからだ。だから、その栞のページをキープしつつ、一つ前のページを捲ると、そこにはその章のタイトルが、わかりやすく書いてあった。

――恋人。

「……と、友達？」

　その時、俺は吸い込まれるように、"その章"の初めから、読みはじめていた。

　今思えば、おかしな話だ。
　ブックカバーをこじ開けるのは忍びないと思ったのかもしれない。いや、悪いことをしているのではないのだけど、彼の秘密を覗いている、という背徳感があったのかもしれない。
　結局、彼が戻ってくるまでのそう長くはない時間を、その"背徳的"な読書に費やすことになるのだった。

***

「ごめん、待たせたかな」

「……あ、いや、大丈夫、ちびちびやってたから」

「そうか、ならいいんだが」

　後ろから声がかかって、慌てて本を閉じた俺。そのかわりに手元のマグカップを持ち上げて、それに応える。別にやましいことをしていたわけではないのに、俺は咄嗟にその本を自分の背後へ隠していた。
　振り返ると、彼が少し眠そうな目をこすりながら、少し広めのソファー、これは2.5シータくらいの大きさであるが、その端っこに腰を下ろすところだった。その動揺を悟られないように、俺は自然を装って聞いた。

「……さすがに眠いか？」

「いや、大丈夫。カジの方も、今日は外出だったから疲れただろ。着替え、洗面所に置いといたから、先風呂入ってきていいぞ」

「あ、うん、ありがとう」

　お手洗いだけにしては遅いな、と思ったら、まさかそんな準備までしているとは。俺は背後の本をそのまま大きなクッションの裏側、奥へと押し込んで、そっと立ち上がった。明日帰る前にそっと本棚に戻せば良い、ただそれだけの話だ。
　ずっとソファに腰を下ろしていたせいか、思った以上に酔いが回ってきていることを、その時に知った。
　俺は、先程読んでいた章の内容を思い出していた。これがもし勘違いだったら、とも思ったが、今思い返せば"それ"を踏まえると辻褄が合うということも多々あった。言い換えれば、確度の高い自信があった。もちろん、それを黙っていることもできたのだが、その時の俺はそうは考えなかった。

――もっと彼のことを知って、もっと仲良くなりたい。

　だから、自分なりに彼とちゃんと向き合いたい、ちゃんと話がしたい、そう思った。それをどう伝えようかと逡巡していると、その俺の様子を不思議そうに眺める彼と目が合ってしまった。
　いつもと変わらない、でも少しだけ眠そうな目を細めて俺を見る彼。

「どうした、カジ、大丈夫か？」

「あ、ごめん、大丈夫。……サトシ、さ」

「うん」

　その次に俺が伝えた言葉を聞いた彼は、目を丸くしてきょとん、としていた。
　だが、その時の自分には、それに続けられるだけの言葉を用意できていなかった。なので、俺はそんな彼から目をそらして自分の鞄を漁り始める。
　一度、目をそらしてしまうと再度彼の表情を見るのが何故か怖くなってしまって、俺は鞄に突っ込んであった替えの下着だけを持って、洗面所に駆け込んだのだった。

***

「あー、つかれたー」

　風呂の扉を開けると、今日もやっぱりお湯が張ってあった。はじめのうちはシャワーでいいと伝えていたが、彼が湯船を張るのが好きなことが判ってからは言われるまま甘えることにしている。
　彼の家の風呂は広い。浴室のサイズにこだわって選んだ、という言葉は間違いなく、大人二人が入っても余裕がある、というのは言い過ぎかもしれないが、決して窮屈ではない。洗い場もそうだが、湯船の大きさも長身の俺が足を伸ばせるくらいなのだ。自分の家の風呂よりも広いのは間違いない。
　風呂好きなんだよなあ、サトシ。来年の旅行はどこに行こうかな。

　シャワーで一日の汚れを洗い落として、一番風呂をいただくことにする。すでに入浴剤――これは著名な温泉地から買ってきたものだったはず――は投入されていた。
　お湯が青色に染まっていて、青色の温泉ってなんだろう、と思ったが、驚いたことにそういったものは存在するらしい。確か日によって色が変わるとか、そんな馬鹿な。
　温度は少し低め、と俺の好みまでバッチリだ。

「……なんで、あんなこと言っちゃったんだろ」

　その心地よい塩梅なお湯に浸かりながら、俺は今更ながらに後悔の念を覚えていた。

　彼だって突然何を言い出したんだこいつは、と思っただろう。もちろん、俺が突然変なことを言い出すようなタマだというのは判っているはずだし、今回もその思いつきなんだ、と思っているはずだ。だから、本当に彼が来るとは限らない

――サトシ、話したいことあるからさ、一緒に風呂はいらねえ？俺、先行ってっから！

　降って湧いた別のトピックとは別に、元々彼へ伝えたいことはあった。
　とはいえ、適切な場所は風呂の中であるわけはないし、ましてやそれが温泉でも銭湯でもなく、距離感がここまで近くなる彼の家の風呂である必要は全くなかった。二人で旅行などは何度も行っているし、一緒に風呂に入ったことだって数えられないくらいはある。だが、彼の家の風呂に二人で入る、というのは初めてだ。まだ実現はしていないわけだけど。
　ともかく、そういうわけで俺がおかしなことを言っていると思われても仕方ないわけだった。

――それはそうだ。

　俺が勝手に結論付けただけで、彼が本当に"そう"である保証はないし、だとしても、いきなりあんなことを言われて、はい、と返事を期待するのもおかしいだろう。だけど、今まさに俺が行ってしまった奇行は、俺なりの彼への向き合い方としての一つの答えなのだった。少なくともその時はそう考えていた。
　ふう、ともう一度、大きなため息を付いた。
　俺は自分の、そして彼の誕生日に何をやってるんだか……。酔っ払っていた、で済む話であればいいが、今回の件はいささか度を超えてしまっているような気もしている。だから、体を包み込む温かさとは裏腹に、俺は少しだけ恐怖を覚えていた。
　これから何が起こるか、ではない。もし、これで彼に嫌われるようなことがあったら――

――浴室のドアの前に影が見えたのは、そんな事を考えていたときだった。

　心臓がどくりとはねる。
　そして、その扉のむこうから、遠慮がちに声がかかる。

「……カジ」

「……」

「入って、いいのか」

――来て、くれた。

　だが、その言葉には、不安が色濃く出ているようだった。別に困らせるつもりはなかったのに、そう思うのだが、概ね自分の責任である。だけど、その言葉になんて返したらいいのか、それが思いつかなくて、それでも待たせるのは悪いと思い、咄嗟に出た言葉がこれだった。

「……おう、背中流してくれよ」

あくまで冷静を装って、なんとか声を絞り出すと、一呼吸置いてから遠慮がちに、ゆっくりと扉が開いた。
そして、俺とそうガタイの変わらない大男が入ってくる。その表情は決して明るいものではなかったが、暗い、というわけでもなかった。
いつも思うが、彼は本当に無駄のない体をしている。最近少しだけお腹周りが気になってきた俺としては、羨ましい限りだ。とはいえ、俺もまだ学生時代の貯金が残っているから筋肉量には自信がある。が、その俺からしても、彼の体躯にはかなわない。

「サトシ、相変わらず綺麗な体してんなあ」

「……そうか？運動、してるからかな」

「ジムなんてもう一ヶ月は行ってねえぞ、よく続くよなあ」

「家の近くにあるからな。カジも週に一回くらい行けば違うんじゃないか。元々体出来てるんだし」

「へいへい、努力してみるわ……」

そう言って、椅子に腰を下ろす彼を見届けると、シャワーの音がなり始めて、一旦そこで会話が中断された。俺は口を閉ざして、目をつむることにする。
不思議な感覚だ。
夏希と一緒に風呂に入ったことは……まあ、何度かはあるが。その時の感覚とも違う、でも、この感覚は嫌ではない。
彼は温泉が好きで、場所だけではなく、泉質、歴史にも詳しい。だから、何度か旅行についていったこともある。その時は当然二人で温泉に入るわけだし、場所によっては貸切風呂だったりで、こんなふうに距離が近いことだって何度もあったが、今感じているこの気持ちは、それらの時のいずれの感覚とも異なっていた。
シャワーの規則正しい音が止まって、彼は頭を洗い始めたようだ。概ね短髪な彼は、いつもサクッと洗い終えられていいなあと思う。一度短くしたことはあるが、思ったより評判が良くなかったので、それ以降は止めている。
襟足が伸びて厄介に感じるまでは美容院から足が遠のく俺からすると、ドライヤーと縁がなさそうな彼の髪型は羨ましい。
またシャワーの音が鳴り始めて、顔をあげると、彼がボディーソープへ手を伸ばすのが見えた。なにか、話すきっかけが欲しい。だから、俺は心を決めて、彼に声をかけた。

「サトシ、背中流すよ」

「……じゃあ、頼む」

「まかしとき一」

少し大きめのタオルを受け取って、彼が俺に背を向けて座り直す。シャワーの音が止まって、また、

静寂が訪れた。

「……」

「……」

　ゴシゴシと、無言で彼の広い背中をこする。
　自分の背中をこうやって洗うことがないから比較はできないが、広い背中だなあと思う。
　一緒にいると兄弟のように見えるね、と先輩方に言われたことがあるが、それならどっちが兄貴で、どっちが弟になるんだろうな、と真面目に考えたことがある。結局出た答えとしては、俺が双子の弟だ、という設定が一番しっくりきた。まさに、俺たちの距離感にピッタリだ。
　そんなどうでもいいことを考えていたら、彼の方から声をかけられることになって、俺ははっとした。

「……カジ」

「ん」

「あとで、俺もやるよ」

「……うん」

　肩周りをだいたい終えて、背中を伝って腰周りを強めにこする。
　う一ん、本当に無駄な肉がないな、自分の腹をちらりと見ながら、少し恥ずかしくなってしまう。同時に、俺は何をやってるんだろうな、とも思う。今のこの状況はやっぱりおかしいし、それを受け入れている彼も彼だと思う。
　だが、このタイミングではないな、そう思って、俺は黙って目の前の広い背中へと向き直った。よし、差し障りのない話題を切り出すことにしよう。

「こうやって見ると体でかく見えるな、サトシ」

「……カジが言うなよ」

「自分の体が大きいかどうかなんて、自分じゃわからないし」

「俺から見たらお前が巨人かと思うよ」

「周りからはどっちも変わらんと思われてるんだろうな」

「……違いない」

　小さな笑い声が聞こえた、それだけのことで安心する。気張っていた自分の心が少しずつ溶けはじめているのを感じる。そうだ、あくまで自分らしくあれば良いのだ。
　……だいたい終わったかな、掴む余地のない脇腹あたりを何度か撫でて、肩越しにタオルを手渡

す。

「ありがと」

「どういたまして一」

　前は自分でやってな、そう言ってぽんぽん、と彼の肩を両手で叩く。そのまま肩に手をおいたまま、よっこらせ、と立ち上がると、立ちくらみを覚えた。湯船に入るのもあれだな、と思って俺は浴槽の縁に腰掛けると、大きな鏡が視界に入る。
　映しだされる世界の中では、彼が体を洗っている姿があり、それが何となく新鮮だった。

（でも、こうやって一緒に風呂に入るのも、いいもんだな）

　少なからず自分でも驚いていた。子供の時ならともかく、大人になってこうやって成人男性二人で家庭用の風呂に入るなんて、おかしいだろうか。いや、おかしいとか普通とかではない、答えはいつだってその”二人”の中にあるはずだ。今こうして自然に二人でいる、というのが何よりの答えだろう。
　そんな俺の視線に気づいたのか、脛あたりをゴシゴシしていた彼と目が合う。そこで目を背けたりしないのがいつもの俺だ。なんでもないよ、というのを伝えるために小さく首を振ると、一度だけ頷いて、またゴシゴシとし始めた彼。
　何見てるんだ、とかそういった野暮なことを聞いてこない彼の気遣いが、ここではとてもありがたい。そのままぼ一っと眺めていると、再びシャワーの音が鳴り始めて、間もなくして彼が立ち上がった。

「……交代しよか」

「うん」

　シャンプーはこれで、ボディソープはこれ、と一通り指南を受けて、先程まで彼が座っていた椅子を譲り受けた。ここに立ち入るのは初めてではないから勝手は知っているが、彼にはあまりこだわりはないのか、シャンプーは時期によって種類が変わっている事が多い。
　きっと気分で買っているのだろう、よく見ると”生姜シャンプー”という、もはやどこで手に入れたのかわからないような代物だった。

「サトシ、このシャンプーは……」

「……妹が海外旅行で買ってきてくれたやつでな」

「なるほどな、納得だわ」

　まさか自分で買うわけはないよな。こんなところであらぬ「初体験」をするとは、と思いつつも、その代物を何プッシュかしてみる。鼻を近づけてみると確かに、仄かな生姜の香りを感じた。
　まあ、紅葉真っ只中のこの時期的には、悪くないチョイスなのかもしれない。
　シャンプーを泡立てながら、ちらっと横目で見ると、彼はぼ一っと天井の方を見つめているようだっ

た。そうだ、彼は何を考えているのだろう。気にはなったけど、俺は何も知らない風を装ってゴシゴシと泡立てる作業を続けることにした。次第に生姜の香りがただよってきて不思議な気分になる。確かに、これはエステというか、リラクゼーションサロンなどで漂ってくる香りに近い。
　洗い流すのが勿体無いな、そう思いつつも、レバーを倒して降り注ぐ滝のようなシャワーが、それをいい感じに仕上げていったのだった。

「カジ、タオル」

「お、ありがと」

　ボディーソープに手を伸ばそうとしたところで、後ろから声がかかる。振り向かずにタオルを手渡して、それが受け取られたことを確認すると、俺は目の前の鏡に向きなおった。
　もくもくと背中をこすってくれる彼を眺めながら、俺は、彼が話を切り出してくれるのを待っていた。時折力が入って気持ち良い。デスクワークの日は肩がこるし、外回りの日は足が疲れるやらで、最近は加齢を感じることが増えた。
　若いうちは怖いもの知らずで、周りに何を言われようがこんな日が来るなんて思ってもいなかったものだから、ヒトというのは何事も自身で体験をしないと、物事は伝わらないのだとしみじみ思う。
　そんな事を考えているうちに、ぬっと後ろからタオルが手渡される。ああ、もう終わってしまったのか。

「さんきゅー」

「おう、前は自分でやってな」

「まかしとき一」

　一日の汚れを洗い落とさないとな、と独り言をつぶやいて、その逞しい腕からタオルを受け取る。それに対して、今日はいい日だったな、と答えてくれた彼は本当にいいヤツだ。
　体についた泡をざっと流し終えて、一息つく。浴槽がある方へ振り向くと、顔を上げた彼とちょうど目が合った。
　ゆっくりと椅子から立ち上がると、湯船から出ようとする彼。それを片手で制して、とりあえず縁へ腰掛けることにする。

「二人だと、ちょっと狭いかな」

「……俺はもう上がるから、いいぞ」

「いや、なんとかなるだろ」

　彼のその言葉をよそに、俺は湯船へ足を入れる。お湯の量的に多少は溢れてしまうだろうが、ゆっくり入れば問題ないだろう。
　その様子をぼ一っと眺めている彼を横目に、少しずつ体を沈めて、流れていくお湯を見守る。この広さなら、お湯が外に漏れることもないからと、そのまま体を沈めきった。さすがの広さの風呂でも、

二人で入ると少しだけ体が触れ合ってしまう。そして、自ずと二人が向き合う形になった。
　水位が落ち着いて、流れ出る水の音も消えていって、それを見届けて、お互いの足と膝が少しだけ触れ合って、俺は一息つく。

「ふう、やっぱ広いなあ、この風呂」

「カジの家のだって、それなりに広かったと思うが」

「うちのよりも一回り大きいんじゃないかなあ。夏希と入ったときはこんなに余裕なかったぜ」

「二人、で入るのか」

「入るだろ！つっても、いつもじゃないけどさ」

　ごめん、俺は独り身だからわからんくて、そう苦笑いする彼は、さっきまでの戸惑いがどこへやら、やっぱりいつもの彼だった。それを言われたら何も言えないじゃん、と言い返してしまうと、また謝られてしまうのが分かっているから、その時はそんなことないよと言うだけに留めた。
　大きく伸びをして足を伸ばしてみる。横幅が少し広くてよかった、体育座りをした彼の両側にスペースがあって、そこにうまく収まった。
　その様子をぼーっと見ていたのだろうか、何となく視線を上げると、彼は恥ずかしそうに視線を逸してしまった。
　足、伸ばしていいよ、と言ったのだが、俺はこのままで大丈夫と断られてしまった。そっか、そう言ってもう一度伸びをする俺に、今度は彼が口を開いた。

「……夏希さんとは、うまくやってるのか」

「おかげさまでな」

「そうか、それは良かった」

「サトシに会いたがってたから、今度また飯とか付きあってやってくんねえか」

「……俺でよければ」

「おう、サトシがいいんだ」

　そう言うと、彼も俺に合わせて笑ってくれる。
　相変わらず料理はしているようで、ちらっとキッチンを覗いたときに、明日の朝ご飯になるであろうサラダの下ごしらえがしてあったのが見えた。いつもは朝ご飯食べてないんだよね、と言っている彼だが、俺が遊びに来るときは、もれなく絵に描いたようなブレークファースト――朝食ではなく、ブレークファーストという表現が適切だ――が出てくるのだ。ちょっと申し訳ないなと思いつつも、いつもの密かな楽しみの一つなのだ。

「明日の朝ご飯、楽しみにしてるよ」

「……ん」

　いきなり話題が変わったことに驚いたのか、ちょっとだけ目を開けて俺の方を見た彼は、その言葉にうんうんと頷いた。目ざといな、と思われただろうか、でも、彼の表情は明るかった。俺は喜びを表現するようにもう一度大きく伸びをして、少しだけ深く体を沈めた。
　彼を浴室に招き入れたときにあった緊張感はだいぶ薄れてきて、張り詰めていた糸が緩みはじめているのを感じていた。だから俺は、自分がやらかした失態をなかったコトにして、このまま時間をいなしてしまおう、と思っていた。
　何も、こんな攻めた状況で話すことでもないし、俺が早とちりをした可能性だって大いにある。むしろ、冷静に考えればその可能性のほうが高い。

　ぽつん、と水滴が落ちてきて、目の前の水面が震えた。それに合わせて静寂が訪れて、今まで聞こえていなかった給湯器の音、換気扇の音、そして水面が動く音が耳に入って来る。
　うごめく水面には、気難しい表情をしているだろう自分の顔は映らず、相変わらず澄んだ青色が揺れていた。

　ふと顔を上げて彼の方を見ると、彼は目を瞑っているようだった。もちろん、寝ているわけではなかろう、だから俺も彼に習って目を閉じることにして、自分の意識をどこか遠くに飛ばしてしまうことにした。湯温は先程より気持ちぬるくなっていたが、こうやってぼんやりと浸かるには非常に良い塩梅になっていた。

　きっと、踏み込むのはこのタイミングではなかったのだろう。自分が先走りすぎていただけで、彼からしたらそれこそ青天の霹靂であろうし。残念、そう思う気持ちがある一方で、考えようによっては当然、無難な帰着点であるとも言えた。
　だから俺はこの、どこかおかしな、それでいて心地の良い時間に埋もれてしまおうと思った。

――今いまの全てを一度忘れてしまおう、そうしたら、また明日目が覚めても、今までどおりやっていける。

「……カジ」

　どのくらい、そうしていただろう。
　きっと、時間にすると数分くらいだったのだろうと思う。少しだけ水面が揺れて、彼が口を開いた。その言葉に、まどろみへ埋もれかけていた俺の意識が戻ってくる。

「もしかして、寝てるのか」

「んや、起きてるよ」

「良かった。疲れて寝ちゃってるのかと」

「気持ちよくてウトウトはしてたけどさ」

「……そっか」

　ゆっくりと目を開く。
　その時、自分自身が少しだけ夢の世界に足を踏み入れていたことに気づくが、口を結んで水面を見つめる精悍な彼の表情が目に入って、突如として意識が覚醒していくのに気づいた。
　彼は、そのまま顔を上げずに、言葉を続けた。

「俺。カジに、さ。言っとかないといけないことがあって」

「……うん」

「……もう、言わなくても判ってるかもしれないけど」

「うん」

　そこで言葉を区切る彼。
　途端に静けさが辺りを支配する。その静寂を嫌うように、換気扇の音、水面の揺れが発生させる小さな音が、耳の奥深くをくすぐってくる。
　キーンと耳鳴りがした。自分が何かを話すわけでもないのに、唐突に喉の乾きが襲ってきて、思わず唾を飲み込む。

　そんな中、彼のその視線が指す先は位置を定めずに漂っていたのだが、その一瞬、俺の顔を捉えた。キリキリと耳障りのする音が遠のいて行って、何度目かの静寂。
　彼が、閉ざしていた重い口を開いた。

「俺……、ゲイなんだ」

　ぴたん、と天井から水滴が落ちてきて、小さく音を立てた。

　その瞬間、うるさいくらいの耳鳴りが再び襲ってきて、そして何処か遠くへ消えていった。
　自分が息を呑む音が、何処か遠くから聞こえるようで、自分自身の意識が何処か遠くへ飛んでいってしまっているようだった。

　ゲイ、の意味は知っている。そして、彼の"一言"がどのような意味を持つものであるのかも、だ。
　俺は、むしろ安心していたのだと思う。なぜなら、"その"一言は予期していたものだったから。
　それなのに、わかっていたはずなのに、心の準備は済んでいたはずなのに、頭が真っ白になってしまった自分がそこには居て。
　俺自身、その時は、口を開きかけたまま固まってしまったのだった。

　今更言うまでもないが、こうやって彼と一緒に居るのは俺の意思で、今、一緒に湯船に浸かっているのだって、当然俺の意思だ。

この状態は誰かに強いられたわけでもなく、頼まれたわけでもない。ましてや、彼に懇願されたわけでもない。俺は、自分がこうありたいと望んで、ここに居る。その事実は間違いない、そう思っていた。
彼の一番の親友は俺で、俺は彼を一番よく理解している、そう思っていた。
だから、今のこの状態が、彼にとっては"普通"ではないと感じているだろうし、その理由を、ここで俺が説明することだって容易だ、そう思っていた。

だけど、それは違ったのだ。口を開きかけた時に、それがわかった。

"いつも"の俺は、こんなことをしない。まるで、人様の家の玄関や居間、いや、寝室に土足で入り込むような行為だ。
冷静に考えればわかることだった。彼は、今のこの距離感の意味を図りかねているだろうし、困惑しているだろうに違いない。
俺があそこで、本棚からあの"本"を引っ張り出してこなければ、あの"章"を読んでいなければ、そして、一緒に風呂に入ろうなどということをを彼に伝えなければ——
今、彼が俺の目の前で、このような告白を迫られるようなことにはならなかっただろう。

そこまで考えて、うかつな言葉は誤解を招くだろう、咄嗟にそう思った。それは俺がこのタイミングで唯一自分の拠り所にできる考えでもあった。

俺が予想していた通り、クッションの裏に隠した本を、彼は目聡くも見つけてしまったのだろう。
いや、彼はただ親切心で、俺が抱えていたクッションを綺麗に置き直そうとしただけなのかもしれない。
本に栞を挟んでいたこともわかっているはずだし、そのページを俺が読んだことくらいは、想像するに容易い。
いや、俺があんなことを口走ってしまったから、彼は慌てて本を探したのかもしれない。そうだ、やましいことなんてないわけだし、俺は堂々と本をテーブルに置いておけばよかったのだ。それを、咄嗟に隠してしまったもんだから、俺が自分で勝手に描いた"空想のシナリオ"が実現してしまって、そのせいで、彼はこうやって本来言わなくても良いことを"言わされた"のではないか。

——なんだよ、"全部"俺のせいじゃないか。

俺は、謝りたかった。だけど、それは同時に誤解を生んでしまう言葉でもあった。そうではない。自分の今、この考えをどう伝えたらいいのか。
しかし、俺にはあまりにも準備が足りていなかった。

——だから何だ、俺は何も気にしていない。

——サトシはサトシだろ。そんなことは関係ないよ。

それらしい言葉が流れ星のように脳内を駆け巡る。だけど、本当に不思議なのだが、それらをどう言葉にしてよいのかがわからなかったのだ。さっきまでは自信満々だったのに。
"伝わるであろう言葉"を探していた、この気持ちを正しく伝える言葉を。ただ、考えれば考えるほど、

今の俺の持つ"言葉"は貧弱であることに気づく。
　気持ちはこんなにもはっきりしているのに、それを適切に表現する言葉が見つからないこの窮地に、俺自身までもが固まってしまっていたのだ。

　どれだけの時間逡巡していたのか。

　その短くも長くもある沈黙をどう受け取ったのか、バツが悪そうに視線を外してしまった彼。

「……ごめん」

「……え？」

「……」

「なんで、……謝んの」

「……っ、ごめん……」

「……！」

　その時、俺の目に飛び込んできたのは。彼の瞳から零れ落ちる一筋の涙だった。

　思わぬ事態に言葉を失ってしまう。涙に気づいた彼は、俺を拒絶するように顔を背けた。
　俺は、なんてことをしてしまったんだ。

――これでは、彼を追い詰めてしまっただけじゃないか。

　違う、俺はこんなことをしたかったわけではない。
　断じて、違う。

　しかし俺は未だ、この気持ちをどう伝えたら良いのかがわからなくて。頭を振り絞っても、どうしても見つからなくて、辛くて、苦しくて。
　だから、せめてそれだけでも伝えたくて、俺は、思わず立ち上がっていた。

「違う！！」

　咄嗟に目の前――手を伸ばせば、すぐ届く距離にいた彼の肩を掴んだ。

　ぐっと距離が近づいて、顔を上げた彼の、その悲痛な表情が目に入った。
　その時、俺は彼だけではなく、自分自身までもを傷つけてしまっていることに気づいたのだった。

　彼は、きっと後悔している。
　自分が"言った"ことに対して、自分を傷つけてしまったことを。

彼は、きっと後悔している。
自分が"言ってしまった"ことに対して、俺を傷つけた"かもしれない"ことを。

彼は、きっと後悔している。
彼が自分自身を傷つけたことを、"俺"が後悔していると思っているだろうことを。

だから、俺は伝えなければならなかった。とっさに出てくれたその言葉を、俺はぐっと噛みしめて、それでいて自分自身を諭すように繰り返すのだった。

「違うんだ、サトシ。違うんだよ……」

違う――その言葉だけが、この場では"正しい"と思えた。

だから、俺はそれを繰り返した。伝えられない、ということがこんなにも苦しいことだなんて。その事実が悔しくて、彼の肩を抑えていた力を強くして、それでも別な言葉を絞り出そうと思った。

「違う、違うんだよ……」

「カジ……」

「……サトシが謝ることなんて、何一つないだろ。だから、謝んなよ……謝られちゃったら、そしたら、俺、なんて言ったらいいのか、わかんねえよ。だって、だって、お前は何も悪くないだろ、何も。だから、謝らないでくれよ……俺、俺は……」

なんとか絞り出した言葉は、少しは彼に響いたのかもしれない。
溢れ出していた涙を少し掬って、その少しだけ赤くなった目で、俺を見据える。

その瞳には、やはり悲しみが色濃く映っていたが、表情は少しだけ、それが薄れているように見えた。はっとして、続きの言葉を探していたら、少しだけ彼の口元が動いたのがみえて、俺は身構えた。

「……カジは、ほんとに、いいやつだな」

「……」

「俺、もしかしたら避けられちゃうんじゃないか、って思ってた。でも、カジがそんなことくらいで俺を嫌ったりしないだろうとも思ってた、信じてた。こんな俺と辛抱強く何年も一緒に居られるやつなんて、そうそういないだろうから。
カジは、俺には勿体無いくらいのいいヤツだってことも、よくわかってる。だから、カジは、ちゃんと俺のこと、親友だと思ってくれてることだって、俺もよく、分かってる。これくらいのことで嫌ったりしないってことも」

「それなら――」

「――でも！」

「！」

　そこで言葉を区切った彼。初めて耳にするかもしれない、彼の、力が籠もった言霊。
　その、"でも"、に込められた意思は強固なものなのだろう。
　だからその言葉を遮ろうとした俺は口を閉ざして、それに続く言葉を待った。

「でも、……俺は」

「……」

「俺は、もしかしたらカジのことを"そういう風"に見てしまっているのかもしれない。カジはかっこいいし、一緒に居て楽しいし、正直、好みのタイプだし。実際、ドキドキしたことだってある。だから、近くに居たい、一緒に居たい、もっと仲良くなりたいって、そう思ってたのかもしれない。
　いや、実際……最初はそう思ってた。だから、そんなカジと話せて、そしてこうやって友達になれて、凄く嬉しかった」

「……」

「カジは――きっと、俺のこと、友達だと、いや、親友だと思ってくれてる。それくらい、俺だってわかる。すごい嬉しいし、俺もそう思ってる。
　でも、俺は、カジとは"違う"気持ち――"そう"じゃない気持ちがあるのかもしれない――いや、今はそういう目でカジを見てない、そう思ってる。……そうありたいと思ってる。それでも、カジは、こうやって近くに居てくれて、こんな俺のことを気にかけてくれて、こうやって、よくわからないことを言ってる俺の話を聞いてくれる。
　だから、俺、悲しいのに……悲しいはずなのに、それをちょっとだけ嬉しいと思ってしまってる、それに、ちょっとだけドキドキだってしてる、こんな時なのに。
　俺、それがすごく、すごく嫌だ。自分で自分が気持ち悪い。でも、カジに気持ち悪いって思ってほしくない。カジのこと、大好きなのに、一緒に居たいと思ってるのに、でも、この気持ちが何処から来てるのか、わかんない。それが、辛くて、悔しくて、申し訳なくて、苦しくて、だから……俺は、どうしたらいいのか、わかんないんだ……」

　その独白を、俺はただ呆然と聞いていた。

　俺は、たまらなく悔しかった。彼のその仮説を、完全に否定できるだけの言葉を持ち合わせていなかったからだ。
　いや、持っているはずがなかった。その気持ちはとても深いところに根付いていて、他人が土足で踏み入れられる領域ではない。
　彼が"そう"で、"そう"であるヒトでしかわからない悩み、それを完全に理解することなんてできない。理解できるなんて、言えるわけがない。

　だから、それができないのが俺はたまらなく悲しい。本当に、悔しい。

　一介の友人――親友であっても、いや、それがたとえ"肉親"だったとしても、"わかるよ"、だなんて気軽に言うことなんて、できるわけがないのだ。
　それが悔しくて、悲しくて、俺は歯を食いしばる。

　でも、それでも、それでも、俺は伝えたかった。

「……それでも！」

「……！」

　次の瞬間、俺は彼を抱きしめていた。

　俺は、彼がどこか遠くに行ってしまうかもしれない、そう思った、感じた。怖くなったのだ。
　そんなの、嫌だ、絶対に嫌だ。放したくない。逃がしたくない、そんな気持ちをこの腕に込めて。最近は運動不足で、たるんでしまっているかもしれないこの腕だけど、大事なものを落とすわけにはいかない。

「サトシは、俺のことを好きで、一緒にいてくれているんだろ。その気持ちは、絶対に嘘じゃない！だから、そんな事言うなよ……俺、サトシのこと、誰よりも分かってるつもりだったのに」

「……カジ」

「どんな"好き"だっていいじゃん。好きになることに理由なんてないし、好きにいいも悪いもないだろ！
　"好き"だってことは、一緒にて楽しくて、一緒に居たいってことなんだろ？それは男とか、女とか、大人か子供かなんて、関係ないはずだろ。
　俺は馬鹿だから、サトシの言う"好き"が、もしかしたらわかってないかもしれない。だけど、それはサトシだけじゃない、夏希だってそうだよ。だって、他人の気持ちなんて、本当のところはわかんないだろ。サトシの好きを俺がわからないように、俺の好きだって、サトシにはわかんないはずだろ。
　でも、どんな好きだって、本当に本当に好きなんだったら、その”気持ち”が間違いだなんて、あるわけないよ。
　……俺は、サトシが好きだよ。この気持ちは、絶対に嘘じゃない。だから、こうやってサトシと一緒にいる。嫌なわけないだろ。俺――嬉しいよ、サトシが、こうやって俺のこと、好きになってくれて。
　"好き"なヤツに"好き"って言われることって、嬉しいことだよ。そうじゃなかったら、それは本当に好きじゃないってことだと思う。俺、いま、すごく嬉しいよ。俺、サトシのこと……好き、だから」

「……、ごめん」

「もうあやまんなよ。……そんなさ、突き放すようなこと、言わないでくれよ。俺、悲しいよ、辛いよ。こんな、サトシを困らせたり、泣かせたりするつもりなんて、全然なかったのによ……」

「……、っ、ごめん……」

　だからあやまんなよ、と言おうとして、何かがこみ上げてきたことに気づく。
　まぶたを開けたら、視界がぼやけていることに気がついた。俺まで涙を流していたらしい。
　これはもらい泣きなんだ、そう言い聞かせて、それでも強く彼の目を見つめると、少しだけ赤くなった瞳から、また、一筋の涙が滑り落ちた。

　その、憂い、不安を浮かべながらも、それでも笑おうとする彼の、その健気な表情を見て、俺は何かが、自分の胸の奥深くで鼓動し始めるのを感じていた。
　ごくり、と自分の喉がなる音が、うるさいくらいに聞こえた。

　だから、俺は彼の背中に回していた腕を少し解いて、彼ともう一度向き直った。

「サトシ」

「……」

「……これからすること、俺達だけの秘密な」

「……！」

　目をつむって近づけた口先が、彼のそれとぶつかって、途端に辺りは静寂に包まれた。
　その感触が、想像していた以上に柔らかくて。その温かさに、俺は自分がしでかしたこと以上に驚いていた。

――ただ触れるだけだったそれは僅か数秒の出来事だったはずなのに、何分にも、何時間にも感じられた。

　顔を少し離して、また見つめ合う形になる。

　今までにもないくらい、距離が近いことに今更近づいて恥ずかしくなったのだけど、もう迷いは吹っ切れていた。
　彼の瞳に少しだけ浮かんだ涙を、自分の右手ですくい取ると、その瞳に綺麗な光が宿って、そして、やっとの笑顔。

「……カジ」

「うん」

「ありがと。……嬉しかった」

「……おう」

「……俺、カジと一緒に居られて、友達で、親友で、本当に良かった」

「……おれも、俺もだ！」

「これからも、一緒に居ても、いいのか」

「何言ってんだよ、当たり前だろ！……嫌って言っても、一緒に居てやるよ」

　絶対に離れてやらないからな、そう言って、俺はもう一度、そっと彼を抱きしめた。
　再び彼の体温を全身に感じて恥ずかしくなるが、今度はその俺の背中に、ゆっくりとためらいがちに、彼の手が伸びてきたのだった。

　それがなんだかすごく嬉しくて、でも恥ずかしくて、何だか胸が高鳴ってしまって、赤くなってしまっているかもしれない表情を隠すように、俺は彼の首元に顔を強く埋める。その時わずかに聞こえた彼の心音は、俺が知っていたものよりずっと速いものだった。そのずっと距離が近づいた彼の、小さな声が聞こえる。

「……もうちょっと、こうしててもいいか？」

「……ああ、もちろん」

「ありがとう、カジ。大好きだ……」

　彼の大きな背中をゆっくりと、優しく撫でる。その時は、不思議と違和感とか、恥ずかしさとかはなく、俺はただただ、暖かな気持ちに包まれていた。
　その言葉に応えるように、俺も彼を抱える力を強くした。

――俺だって、好きだよ。

　俺はそう返すことをしなかった。そのことを、きっと彼も気づいていたと思う。

　そうだ。今は、まだこの距離感でいいのだ、俺はそう信じて、何もかもを忘れて今のこの時間を過ごすことにした。
　胸が高鳴っていたのは彼だけではなかったことは、紛れもない事実で。でも俺は、その“気持ち”を大事に、大事に胸の中へ押し込んだ。
　今この場では温かく包み込んで。そして、またいつか、絶対に思い出せるように。

　そうして、お互いが落ち着いたところで、俺は本当に伝えたかったことを口にした。
　このタイミングが良いとは決して思ってはいなかったが、やむを得ない。自分もこの雰囲気に呑まれていたのだと思う。

「……こんなときにごめん。サトシに頼みがあるんだ」

「……頼み？」

「今日、本当はコレを話したくてさ」

　サトシが妙なこと言うからおかしなことになったけど、と添えると、悪かったな、そう言って口を結ぶ彼。
　冗談だよ、そう言って火照った体を冷ますために湯船から立ち上がって、浴槽の縁に腰掛けた。彼の顔がいつもよりずっと下に来て、見下ろす形になる。
　う、途端に緊張してきた。

「結婚式、……日取りとか決まりそうでさ」

「……そうなのか、おめでたいな」

「ありがとう。それでな、披露宴はさ、あんまり大掛かりではやらないつもりなんだけど、職場の人は呼びたいなとは思ってて」

「……うん」

「んでな、挨拶的なのがあると思うんだけど」

「……」

「えっと……」

　そこまで言って、口の中が乾いてきていることに気がついた。
　くそ、こんな緊張するつもりではなかったはずなのに……。そう思って彼の目を見ると、茶化すことなく、俺の言葉を待ってくれているようだった。

　大きく深呼吸をして、もう一度彼の目をしっかりと見据えて、口を開いた。

「……サトシに、やってほしいなと。やってくれねえか」

　その言葉を受けて、目を丸くする彼。だけど次の瞬間、口元を緩めて微笑んでくれた。
　もう、それだけで十分だった。

「……俺で良ければ」

「おう、サトシがいいんだ」

　そのまま彼の目の前にすっと右手を差し出すと、彼はその手を優しく包み込んでくれるのだった。それがなんだか、見方を変えれば指輪の交換のときのようで、でもそれを茶化すようなことを言うこともできなかった。

　その後、いつまでこうしてたらいいんだ、という彼の言葉で我に返るまで、俺はその幸せな時間に浸っていたのだった。

*** 3章 おわり ***